フューチャー・アースの推進と連携に関する委員会
持続可能な発展のための教育と人材育成の推進分科会
持続可能な発展のための海洋教育と人材育成小委員会（第24期・第3回）
議事要旨

開催日時：平成 31 年 1 月 20 日　14:30～16:30
開催場所：台東区立忍岡小学校ランチルーム
出席者（敬称略・五十音順）：荒井きよみ、川上真哉、川路美沙、田中義靖、永田量子、丹羽淑博、日置光久、松原憲治
欠席者（敬称略・五十音順）：塚田昭一、村松英治、山形俊男、由井薗健
オブザーバー：田口康大、星野薫、松井啓史

配付資料：
資料１：平成 31 年 1 月 22 日開催「FUTURE EARTH と学校教育：ESD/SDGs をどう実践するか」案内
資料２：平成 31 年 2 月 9 日開催「東京大学第 6 回全国海洋教育サミット」案内
資料３：「教室での実験で調べる海の仕組み」（前回話題提供概要版）
資料４：「海の学び旅　海洋教育におけるダークツーリズムの価値と意義」（本日話題提供資料）
資料５：「地域物語の構築の営みとしての海洋教育：気仙沼の事例から」（本日話題提供資料）

１．自己紹介
今回、４名の新委員、３名のオブザーバーの参加のため、自己紹介を行った。

２．Future Earth 及び海洋教育の動き（日置座長）
・「FUTURE EARTH と学校教育：ESD/SDGs をどう実践するか」について
・「東京大学第 6 回全国海洋教育サミット」について
・前回の 2 件の話題提供（マイクロプラスチック、海流実験）について

３．話題提供①（川路委員）
「海の学び旅　海洋教育におけるダークツーリズムの価値と意義」
・自己紹介
・海を学ぶ
・海は私達の生活を支えている
・日本財団にて研修開始後すぐ熊本地震⇒災害支援
・２ヶ月後海洋教育に携わる
・女川への「海の学びの旅」

ディスカッション
・「ダークツーリズム」としての意味付けは何か

→ネガティブなことから学ぶ
・先生方にはどんな学びがあったか
→防災教育の考え方、方向性が強くなった
・防災教育でない海洋教育はあるのか
→教科の内容で扱ったり、総合的な学習の時間で行ったりしている
・管理職の感想・意見はどうだったか
→今回、管理職の参加者がいなかったのでわからなかった
・高等学校を対象としなかったのは何か理由があるか
→全校種を対象とすると対象が広がりすぎてしまうので、今回義務教育段階に絞った
→内容的には高校籍の人間にも受け容れることができるものだったと思う
・現地との交渉の経緯が知りたい
→たくさんの自治体に折衝したが、なかなか難しかった
→GT のだれにどの話をどのあたりまで話してもらうかの調整が本当に難しかった
・カリキュラム開発の観点から「海の恩恵」に対する先生方の反応はどうだったか
→〇〇教育の価値、教科横断的な学習を考える必要がある
→各教科で育む、各教科を超えて基盤となる部分を育む
→現代的な諸課題への対応として取り組む
→二面性を扱った効果についてはなんとも言えない
・SSI 社会科学的課題 SocioScientificIssue との関係はどうか
→海洋教育ならではの意義を考える必要がある
・震災前後での海・環境に対する学習が変わったのか
→検証はできていない
・海に対する指導はどうだったか
・防災の印象（インパクト）が強くなりすぎ、他の内容が弱くなってしまった
・ダークツーリズムは人間の行為に対する言葉、自然は対象にしていない
・夜間中学校では戦争に引っ張られがち、それを踏まえた上で、どう海洋教育に結びつけていくか
・それぞれオーバーラップしている領域はあるが、命に直接かかわることに引っ張られる
・平和教育、防災教育は強烈
・そういうことと関われる良さを積極的に生かしていきたい
・二面性に対してどういう重みをつけるか、重要な視点、継続して調べることが必要
・原発と海洋教育は、視点として新しい
→女川の観光協会の思いと、海沿いにある意味を理解する必要性（ナイーブな問題）

4．話題提供（田口オブザーバ）
「地域物語の構築の営みとしての海洋教育：気仙沼市の事例から」
・〇〇教育ではない海洋教育
・地域の歴史の再構成
・物語論の歴史認識
・経験は因果連関の中に位置づけられることで受容可能になる
・物語りは、理解可能な経験へと組織化することでもある

・気仙沼の海洋教育は、受容可能で理解可能な経験へと組織化する行為ではないか
　・気仙沼と海との物語
　・子どもたち自身の物語
　・教育に関わる人の物語
・二重の意味で開かれている物語
　・外部・他者が関われる
　・「行為」であり続ける
・海洋教育は海洋を教えるのみならず、海との共生を実現化する営み

ディスカッション
・家庭科との親和性が高い話だった
　→正解一つを追求するわけでなく、ナラティブに迫っていく
・空間的な軸はからんでこないのか
　→まずは時間構造が重要で、その中に空間構造がある
・物語という視点は理科教育にもある
　→住んでいる地域が違えばサイエンスへの受け取りは違う
　→「理科」ではなく、地域の科学があったと思う
　→「絶対化」しようとするのはサイエンスではない
・「科学」…議論の面がナラティブに近いのか、そこが弱いのかもしれない
・「NOS 科学の本質」の話に近いのかもしれない
・意味付け、SSI
・世界的にも事実のみを学ぶ要素は少なくなっていると思う
・気仙沼で感じることとして、子どもたちの論争的なところが少ないかなと思った
　→「ふるさと教育」として論争を組み入れている
　→気仙沼で ESD 円卓会議で発表を聞いたが、防潮堤の話は出てこなかった
　→（当時論争になっていた）、これからの課題と思う
・ESD、復興教育、防災教育の関わりをどう考えるか
　→定義は難しい、それぞれの授業をどう捉えるかが大切
・群馬はかるたで防災教育をしている、地域による特性はあるか
　→東北の人はカメラを向けると話し出す
　→関西の人はカメラを向けられると話し難そうにする
　→民話は女性がつくるもの、直接言えないことを民話に託している
　→海と関わっているところと県民性が気になる
　→海の民話は少ない
　→そもそもメルヘンの主人公は女性、グリム兄弟が文字化して残った（書承）
　→フォークロア、コンテなど、国によって様々な形の「民話」が存在する
・体験…忘れ去るもの、経験…長く残るもの

以上